

# 『徐福の基礎と現代の徐福言説』

発行のお知らせ

2024.3.14 著者

約2200年前、秦の始皇帝の命で不老不死の霊薬を探しに、数千人の童男童女を引き連れて日本にやってきたという伝説の徐福。日中の徐福文献、日本各地の徐福伝説と文化活動、国際交流などの基礎を解説し、加えて現代のオカルト徐福を巡る言説の思想的背景を考察する。

徐福って誰？

徐福は史実か、ロマンか、オカルトか？

司馬遷はなぜ『史記』で徐福を描いたのか？

徐福は何のために童男童女を連れて行くのか？

日本全国の徐福伝説はどのようなものか？

徐福伝説が発生した背景は何か？

徐福の学術研究者は何を研究しているのか？

「徐福の会」はどのような活動をしているのか？

徐福一行がユダヤ人だとする背景は何か？

宮下文書が正しいとする背景は何か？

徐福伝説、徐福言説を理解するには、その時代の文化状況を見ることが必要。史記ならば中国の古代、徐福伝説ならば主に近世、徐福ユダヤ論や宮下文書ならば近現代のそれぞれの文化状況を通じて見ると、徐福の姿が浮かび上がる。

## 徐福の基礎 と現代の徐福言説

伊藤健二 著

- ・「歴史としての徐福」と「文化としての徐福」
- ・日本各地の徐福文化と日中韓の国際交流
- ・オカルト徐福論の歴史的思想的背景



約2200年前、秦の始皇帝の命で不老不死の霊薬を探しに、数千人の童男童女を引き連れて日本にやってきたという伝説の徐福。徐福文献、日本各地の徐福伝説と文化活動、国際交流などの基礎を解説し、加えて現代のオカルト徐福を巡る言説の思想的背景を考察する。

### 本書の特徴

- ・基礎的な事項から解説し、徐福を知らない方でも理解できる。
- ・全国の徐福文化一覧表、根拠文献を付し、徐福辞典として使える。
- ・各章によりテーマが異なるが、各章単独でも読めるものとした。
- ・考察は基本的に学術研究者の著作を根拠とし、出典を明記した。



著者 伊藤健二 (元日本徐福協会事務局長)  
発行社 ブイツーソリューション  
発行予定 2024年4月  
定価 1,300円+税 (1430円) (A5 168ページ)  
割引価格 1,000円 送料200円 (送料は何冊でも200円)  
購入方法 ①電子メールで郵便番号、住所、氏名、冊数を明記し、下記のメールで申し込んでください。  
②書籍が届いたら同封案内書の振り込み先に振り込んでください。(振込料金をご負担願います)  
申込先 伊藤健二 xufuito@jcom.zaq.ne.jp

## 『徐福の基礎と現代の徐福言説』 各章の内容の紹介

### 第1章 『史記』の記述とその後の文献

徐福の歴史資料として使えるのは、司馬遷の『史記』である。『史記』は歴史書として高い評価を受けており、「徐福は平原広沢を得て王となり戻らなかった」の文章から、それは日本ではないかと考えられ、日本の徐福伝説成立に大きな影響を与えた。しかし歴史文献の調査は、一部の字句だけを切り抜くのではなく、全体の記述の内容、当時の政治的状況、風習など文化的社会的背景を見る必要があり、この観点で『史記』及びその後の文献を考察する。

### 第2章 様々な徐福群像

徐福に関わる人たちは徐福をどう見ているのか？ 徐福研究は徐福伝承地の郷土史家に支えられているが、それ以外では「本当に徐福が日本に来たの？」と半信半疑ながら日中を結ぶ壮大なロマンに感心を寄せる人がいる。また一部の古代史愛好家は、徐福の来日は歴史的事実だとして、日本の神々や天皇、秦氏などの渡来人と組み合わせて歴史を語る。一方では徐福研究で博士号を取得した学術研究もある。これらの混沌とした徐福群像を整理して紹介する。

### 第3章 日本各地の徐福文化

日本全国の徐福伝説、行事、祭祀などの「徐福文化」を多くの画像を用い、その地方の文化的背景も考察し、徐福を知らない方でも徐福文化のイメージがわかるようにした。最後に全国の徐福文化とその根拠となる文献を一覧表にして紹介し、徐福に興味がある方が各自の研究に役立つようにした。

### 第4章 日本の徐福組織と国際交流

日本各地には徐福を研究、顕彰する徐福会があり、また全国組織である日本徐福協会がある。中国と韓国にも徐福組織があり、相互にフォーラムを開催するなどの交流を行っている。また徐福は日中友好のシンボルとされており、1978年の鄧小平氏の来日時徐福に関する発言、1990年代の文化人の徐福による盛り上がり、近年の徐福を通じた日中関係の断面を見て行く。

### 第5章 徐福伝説の発生要因

徐福伝説が発生した理由はいくつか考えられるが、最大の要因は熊野の修験道だとされる。徐福伝説が数多く発生したのは江戸時代であり、この時代の各地の具体的な伝説を通じて熊野や近世修験道との関連を考察した。また修験道以外の要素についても近世の文化史の中で考察した。

### 第6章 秦氏と徐福

ネット書籍で「徐福」を検索すると、多くが秦氏やユダヤ人と関連づけられている。これらのオカルト的徐福論は歴史的根拠がなく通常の徐福研究者は相手にしないが、ネットでの徐福記事の多くがこの観点なので無視はできず、これらの言説の歴史的、思想的背景を考察した。また一部出版物では羽田孜元総理をオカルトのスターに祭り上げている。羽田孜氏が秦氏との関係を語った講演論文全文を掲載し、羽田孜氏がオカルトとは無縁であり、「先祖が渡来人かも知れない」ことから、アジアの平和を目指す活動を紹介する。

### 第7章 「徐福が書いた？宮下文書」の真実

明治時代、山梨県富士吉田市の民家から、徐福が書いたとする宮下文書（富士古文献）が発見された。そこには古代、今の富士吉田市に帝都がありアマテラスなどの天皇家先祖の神々が生活したとしている。内容は中国の秦始皇帝などの歴代皇帝や徐福も日本人の子孫としているが、これは江戸時代の国学者、平田篤胤の「中国の三皇五帝は皆日本人が中国の蠢く民に教養を与えるために渡ったものだ」などの言説と、日本書紀などを元ネタとして物語りにしたもの。日本に攻めてきた大陸軍や新羅軍と戦い勝利するなど、中国韓国を敵視し、日本の神々と天皇を賛美する「国際的皇国史観」の宮下文書がどのような背景で書かれたかを解説する。